

学校のいじめとネット上の 対人関係との関連

—関係性いじめを受けた女子高校生の事例—

大西彩子*・本庄 勝**・
吉武久美***・三島浩路****・
黒川雅幸*****・吉田俊和***

Relation between Digital Communication and Relational Bullying at School: A Case Study of High School Students

Ayako ONISHI*, Masaru HONJO**,
Kumi YOSHITAKE***, Koji MISHIMA****,
Masayuki KUROKAWA*****, and
Toshikazu YOSHIDA***

In this study, we examined the relation between digital communication and interpersonal communication of relational bullying at high school. This case study is accomplished by interviewing the high school teacher who gave a consultation with some school girls who participated in relational bullying. According to the teacher, the six students were involved in the relational bullying. The six students were using the SNS site "DECOLOG", which is one of the famous SNS sites in Japan, especially for female users. We collected the information of the six students on the Internet.

The state of digital communication network of the high school students and the state of interpersonal communication network at the high school showed the same tendency which eliminates the victim of relational bullying.

key words: relational bullying, cyber bullying, high school student

問題と目的

近年、携帯電話を利用してネットワークへアクセスする高校生が増えている。そんななか、ネットいじめが深刻な教育問題となっている。いじめには殴る蹴るなど被害生徒

に直接危害を加える直接的攻撃によるいじめと、無視や仲間はずれを攻撃手段として他者の受容関係や受容感、友人関係、集団への仲間入りに危害を加える関係性攻撃によるいじめがある(Crick & Grotpeter, 1995)。関係性攻撃によるいじめ(以下、関係性いじめ)は、その性質上、被害者と加害者とは日常生活の中で親密な人間関係を形成していることが前提となり、学校で生起することも多い。ネットいじめでは、悪口やひやかしなど被害生徒に心理的なダメージを与えるようなメッセージを送りつけたり、被害生徒を脅迫するようなメッセージを送りつけたりする方法を直接的攻撃によるネットいじめとするならば、被害生徒を仲間関係のネットワークから排除したり、被害生徒からのメッセージを無視したりする方法で行われるいじめは、ネットによる関係性いじめであるといえる。

三島・黒川・大西・本庄・吉武・長谷川・長谷川・吉田(2010)は、大学生に対する回顧調査から中学・高校時代のインターネットを利用した関係性いじめが存在することを示している。しかし、インターネット上の関係性攻撃については、生徒の動向を把握することが難いため、その特徴が不明確なままである。学校で関係性いじめを受けている被害生徒は、インターネット上でも同じ加害生徒から関係性攻撃を受ける可能性が高いと考えられる。そこで、本研究では学校で関係性いじめを受けた女子高校生の事例を取り上げ、ネット上の被害生徒の状態を対面場面の人間関係と対応させることにより、両者の関連について検討することを目的とする。

方 法

本研究では、関係性いじめを受けた女子高校生の事例について高校教師へ半構造化面接を行うと同時に、PがA, B, C, D, Eに関係性いじめの被害を受けている第三期の仲間はずれが生じた時期から学級での対人関係が落ち着きを見せる第五期の初めにあたる5カ月間(201X年11月~201X年+1年3月)を対象に、主に携帯電話から使用されるSNSサイトであるDECOLOGが提供するブログサービスの情報を収集した(詳細はHonjo, Hasegawa, Hasegawa, Suda, Mishima, & Yoshida(2011)を参照)。なお、本研究では、DECOLOGのアカウントIDを生徒(A, B, C, D, E, P)とし、ネット上の人間関係の繋がり(以下:リンク)をブログの足跡の応答率を基に定義した。具体的には、生徒Xから生徒Yへの足跡の応答率は、生徒Yの記事の件数Article(Y)と、生徒Yの記事に対する生徒Xの足跡の総数Activity(X, Y)との比率Activity(X, Y)/Article(Y)で表した。Figure 1のリンクは、生徒X, Y間のXからY, YからXへの応答率が双方共に0.4以上の場合に存在すると定義した。

面接結果の概要

被害生徒: P

加害生徒: A, B, C, D, E

高校に入学したA, B, C, D, E, Pは第一期(仲間集団の形成: 201X年4月~8月)に親しくなり、学校だけでなくSNSサイトでも交流するようになった。ところが、夏休み中にPがDの彼氏と親しくなり、密かに2人きりで遊ぶ

* 甲南大学文学部

Faculty of Letters, Konan University, 8-9-1 Okamoto, Higashi-Nada-ku, Kobe-shi, Hyogo 658-8501, Japan

** 株式会社 KDDI 研究所

KDDI R&D Laboratories Inc.

*** 岐阜聖徳学園大学教育学部

Department of Education, Gifu Shotoku Gakuen University

**** 中部大学現代教育学部

College of Contemporary Education, Chubu University

***** 愛知教育大学教育学部

Faculty of Education, Aichi University of Education

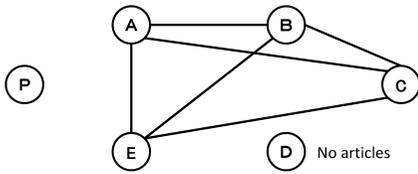


Figure 1 調査対象生徒間のリンク

ようになった。それが第二期（問題の発覚：201X年9月）に仲間集団の知るところとなり、Pはリーダー格のAを筆頭に仲間集団のメンバーからDとの友情を裏切っていると非難される。初めはAたちも仲間集団内の話し合いでこの問題を解決しようとしていたが、第三期（関係性いじめ：201X年10月～12月頃）になると、Pとは価値観が合わないという理由でA、B、C、D、EがPを仲間はずれにした。それからPは学級で完全に孤立するようになり、休み時間も一人で過ごすようになった。A、B、C、D、EはPの前でわざと聞こえるようにPの悪口を言い、ときには男子生徒もそれに参加した。その状態は長く続き（2～3カ月）、Pは10月～1月頃まで友人のいない学校生活を送った。この時期、Pは学校を休むことが多かった。しかし、第四期（新たな仲間集団の形成：201X+1年1月頃）になると、学校での人間関係について相談していた教師の勧めで入部していた音楽部で部活動に懸命に励むことで、Pは部員からも認められ、学校内に自分の居場所を作ることができた。第五期（関係性いじめの解消：201X+1年2月～7月頃）には、学級でPがA、B、C、Eと会話する姿も見られるようになった。

結果と考察

調査対象生徒6名の応答率の計算結果をTable 1に示す。なお、Dはメールやブログなどの小まめな相互連絡が好きではなく、対象期間に記事を1件も投稿しなかったため、応答率の計算ができなかった。Table 1より、加害生徒間(A、B、C、E)と加害生徒(A、B、C、E)・被害生徒(P)間の応答率に違いがあることがわかる。加害生徒間の応答率の平均と分散はそれぞれ、0.57、0.034であったのに対し、加害生徒から被害生徒への応答率の平均と分散は、それぞれ0.073、0.0013であった。一方で被害生徒から加害生徒への応答率の平均と分散を見ると、それぞれ0.42、0.049であった。これより、加害生徒間の応答率是对称性があるのに対し、加害生徒・被害生徒間の応答率是非対称性があることがわかる。すなわち、被害生徒Pは加害生徒A、B、C、Eに無視されながらも、彼女らの記事には応答していることになる。

上記の結果からリンクを表した結果をFigure 1に示す。Pが孤立しており、学校での関係性いじめと同様の構造がネット上でも認められた。DもPと同じく孤立しているが、これは足跡の応答率が計測できなかったためである。

なお、対象生徒から投稿されたすべての記事の内容を確認したが、誹謗・中傷など、明示的なPへの攻撃は全く検出されなかった。その一方で、無視といった関係性攻撃が

Table 1 調査対象生徒の足跡の応答率

		To					
From		→P	→A	→B	→C	→D	→E
P→			0.58	0.61	0.06		0.44
A→		0.09		0.89	0.44		0.78
B→		0.00	0.50		0.47		0.78
C→		0.09	0.50	0.69			0.78
D→		0.09	0.50	0.22	0.36		0.56
E→		0.09	0.50	0.47	0.36		

ネット上でも観測された(Table 1)。これらの結果より、ブログ上でも、学校での関係性いじめとほぼ同様の対人関係が認められることが確認できた。加害生徒間の応答率に対称性があるのは、加害生徒が互いに親密さを維持しようとしているからだと考えられる。一方で、被害生徒が加害生徒に応答を続けているにもかかわらず、加害生徒は被害生徒の記事にコメントをせず、被害生徒が自分の記事に対して書いたコメントにも無反応であった。これは、被害生徒Pが仲間集団に許されることを期待して、ネット上で関わりを持とうと試みているにもかかわらず、それを無視するという形で関係性攻撃が続けられていることを示している。

あくまで一事例だが、本研究によってネットいじめでも関係性攻撃という手段が存在することが明らかになり、学級で行われている関係性攻撃と同様の攻撃がインターネット上でも表れることが示された。今後も研究を継続することで、周囲からは発見することが難しい関係性いじめを、インターネット上のパトロールで確認することができるかもしれない。

謝辞

本研究は、戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)の予算によるものである。

引用文献

Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.

Honjo, M., Hasegawa, T., Hasegawa, T., Suda, T., Mishima, K., & Yoshida, T. 2011 A framework to identify relationships among students in school bullying using digital communication media. *IEEE International Workshop on Social Behavioral Analysis and Behavioral Change*, 1474-1479.

三島浩路・黒川雅幸・大西彩子・本庄 勝・吉武久美・長谷川輝之・長谷川 亨・吉田俊和 2010 ネット上のトラブルや「いじめ」に関する報告—中学・高校生当時の体験を回想して—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), 57, 61-69.

(受稿：2013.9.30；受理：2014.2.19)